偽物の世界

竜樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偽物の世界

【Ｎコード】
Ｎ３７０７Ｂ

【作者名】
竜樹

【あらすじ】
寺沢穂菜はある日両親を殺され天涯孤独の身の上になってしまった。そんな彼女はある特別な能力を持っていたために『柊学園』という能力者だけがはいれる学校に入学した。それから2年たった今、運命の歯車がまわりだした！！

プロローグ（前書き）

未熟者なので多少　読みづらい所もあると思いますが
ぜひ読んでもらえるとうれしいです

プロローグ

夕闇の中
１人の男が物思いにふけっていた。
それは今だに記憶の中に鮮明に残っていた
否、残していたことについてだった。

それは彼が全てを無くした日・・・

そして世界の真実を知った日・・・

そして全てに復讐を誓った日・・・

そして　呟く
「忘れられるわけない」

それは彼が復讐を忘れないための儀式だった

そう例えどんなことがあろうと

例え敵が昔の仲間であろうと

第一章　五つの影

ジリリリ　ジリリリ
目覚まし時計の音が響いた

次の瞬間ベットからのびた手が目覚まし時計を　グシャッ　と音をたてさせながら叩き潰した。

そのまた次の瞬間　今度は部屋中に設置されていた数多くの目覚まし時計一斉に鳴りはじめた

ベットで寝ていた人物は慌てて飛び起きる。黒い髪と黒い目をもった少女だ。枕の横にコナゴナになった目覚まし時計を見て
「またやっちゃった～」とため息をつくと破片を全て集めてゴミ箱にいれた。

そして他の目覚まし時計を止めるため立ち上がった。

着替えを済ませてリビングに行くとまず仏壇に手を合わした。そこには3枚の写真が置かれていた。
少女が呟く
「お父さん、お母さん、お兄ちゃん　穂菜は今日　柊学園中等部を卒業するんだよ。
お父さん達が殺されてもう5年もたつんだよ。　穂菜は今日　柊学園高等部にはいるんだよ。父さん達が殺されてもう2年もたつんだね～。高等部にも特待生ではいれたし　こっちは万事うまくいってるよ。だから心配しないでね。じゃあ　そろそろいくね」
そういうと穂菜はリビングを出ていった。

同時刻
古びた居酒屋にあつまった5つの影があった。
カーテンを閉めきっている上に電気もついていないため顔もはっきり見えない。
「今日が決行でいいんだな」
女性の厳しい声がした。
「うん、今日がベストだ」
ちょっと神経質そうな男性の声が答える。

「キャハハハハーうまく行くといいけど」
軽薄そうな男性の声がいうと

「まあ　なんとかなるんじゃないの」
同じく軽薄そうな女性の声がいう

「僕のデータは確かだよ」
神経質な声が再びひびく

「とにかく今日10時生徒を含めた全員が校庭にでた瞬間を狙う。
各自準備しておけ」
最初の女性の声が命令すると4人の足音が遠ざかっていった

さっきの会話に参加していなかった最後の一人は
「柊学園か」
と呟き去っていった。

第二章　平穏な朝

「ほ～な～」
呼ばれた方向を見ると短髪で良く日に焼けた見るからに体育会系の少女が走ってきた。
穂菜の親友の蒼井　双葉だ。
追い付いてきた双葉がいった
「今日から私達も高等部だね」

「まあ　皆持ち上がるんだけどね。
そういえば【造って】もらいたい物があるんだけど・・・いい？」
穂菜がたずねると
「いいけど何を？」

「・・・目覚まし時計」

「なにアンタまたやっちゃったの？
本当に寝起き悪いねぇ」と少々　呆れたように双葉がいう。
穂菜はむっとしたが事実なので反論できない。
「あたしの能力は時計屋じゃないんだよ。」
説教されて穂菜の機嫌はますます悪くなる。ちなみに穂菜の能力は
「変態」
といって自分の姿を好きに変えることができる。
今朝は手を鉄に変えて時計を壊した。
双葉の能力は『創造』
自分のイメージした物を無から造りだすことができる。

「まあ　放課後までには造っとくよ」

そう聞いた途端穂菜の機嫌は一気によくなった。
「ありがとう双葉様　この恩は一生忘れません」
「そんなに感謝されたら逆に困るよ」
過剰な反応をする穂菜に双葉は照れたように笑った。
こうしていつも通りの朝が通り過ぎていく。

もう二度とくることのない平穏が過ぎていく。

二度と忘れることのない時が迫ってきていた。

黒いコートを着て
黒い靴を履き
黒い髪の
全身　黒ずくめの男が柊学園に向かって歩いて行った。
時計を見る８時３０分
自嘲の笑みをもらした。
「ここまで早く来てしまうなんて・・・
少なからず過去をひきずってるってことか」

第三章　９：００～９：３０

午前　９時
穂菜と双葉は学園の門の前の人だまりの中にいた。
「穂菜　アンタ何組だった？」
人だまりから抜け出し聞いた。
「私は一組だった。双葉は？」
「あたしは五組だった。穂菜とは違うクラスか・・・」
少し落ち込んだように双葉は答えた。
「ハハハハ
双葉君　落ち込むことはない。僕は君と同じクラスだ」
という声が響いた瞬間双葉は更に落ち込んだ。
「佐藤　アンタと同じクラスになって喜ぶヤツなんていやしないよ」
双葉がため息混じりに答えるても
佐藤　洋は少しも堪えずに更に言う。
「そんなことはない。君だって実は嬉しいのだろう。中等部を首席で卒業した僕と同じクラスになれて
「ウザイッ」
ここで双葉がキレた。シャキンという音と共に双葉は細い剣を造った。
「そんなに首席が偉いのか？あぁ？」
双葉は佐藤の首に剣をつきたて聞いた。
佐藤の能力は偵察用なので戦闘が得意な双葉に勝てるはずがなかった。
佐藤は助けを求めるように穂菜を見た。
そして穂菜は気付いていない振りをした。
そこに粘着質な声が割り込んだ。
「蒼井　またお前か・・・」
「げっ野田先生」

中年の髪の少し減った太った教師が双葉のことを睨みつけている。
「野田先生！！」
佐藤が叫びんだ。
「野田先生・・・ええと・・・これには山よりも高く海よりも深い訳が・・・」
「蒼井はともかく放課後に職員室まで来るように」
野田は有無を言わせぬようにいい歩いて行った。
「双葉ドンマイ」
穂菜が言うとため息が帰ってきた。

午前９時３０分
穂菜と双葉はそれぞれの教室にいった。
穂菜はつまらない担当教師の話をききながしていた。
穂菜の席は窓際の１番後ろだった。しかも話を聞かず窓の外ばかり見ていたため　校内に入ってきた集団に気が付いた。
（何？　あの怪しい集団）
その集団は校庭をつっきって校舎の裏に入った。
（すっごく気になるんだけどどーしよー）
穂菜の好奇心が刺激された。
（よーしいっちょ行くか）
「先生トイレ行ってきまーす」
そして何も言われない内に廊下を突っ走っていった。そして誰も見ていないことを確認すると廊下の窓から飛び出した。
ここは３階。
普通の人間ならまず怪我をして、下手をしたら死ぬ高さだ。
しかし穂菜は普通の人間ではなかった。
穂菜の腕が羽根となり落下を止め　穂菜は空に舞い上がった。

第四章　再会

午前９時４５分
様々な男女が柊学園の校舎の裏に集まっていた。
共通しているのは年齢と真っ黒な服だけだった。
腰まである長いく灰色の髪と血のような紅い瞳を持った少女が言う。
「後１５分で作戦開始だ。」
その声は厳しく響いた。
白髪で色素の薄い瞳でメガネをかけた小柄な少年が言う
「いよいよなんだね」
その声は神経質に響いた。
金髪で蒼い瞳を持ちピアスを着けた遊び人の姿の少年が言う。
「ヒャッハーいっちょやりますかぁ」
その声は軽薄に響いた。
赤髪で茶色の瞳を持ったこれまたピアスを着けた少女が言う。
「やって見ましょうか」
その声も軽薄に響いた。
そして漆黒の髪と瞳を持った少年が言う。

「この場所が全ての始まりになる。」

そしてその声は淡々と響いた。

ちょっと離れた場所から聞いていた穂菜は何の事なのか分からずにいたが

（やっぱり怪しい・・・）

と改めて感じた。そしてなぜか少し懐かしい感じがした。

突然

「寺沢　何してんの？」

と言う声背後がからした。

途端に金髪の少年が動いた。

穂菜はとっさにクラスメイト叫んでいた。

「逃げて！！　藤原」

藤原　凶は突然の事に動く事ができなかった。

次の瞬間　凶は血を飛ばしながら倒れて行った。

そして金髪の少年は血を滴らせた剣を持ち　穂菜に向かって振り向いた。

「ヒカリッ」

灰色の髪の少女が責めるように叫ぶ。
「なんだよ　カスミ
どうせ殺すんだろ」
ヒカリが笑いながら返す。
「私達がするべき事はそんなことでは無いだろ。
私達が今するべきことは世界の犠牲者を助ける事だ」
カスミが答える。
「目撃者は消さないとダメじゃないの？ハク？」
赤髪の少女がめんどくさそうに言った。
「ホムラ　ヒカリ
僕も余計な殺しには反対するよ。
　カスミの能力で記憶を消せば事は済む。」
メガネをかけた少年　ハクが答える。
「ふーん」
ホムラと呼ばれた赤髪の少女がわかったのかわかって無いのか曖昧な返事をする。
「時間だ行くぞ」

黒髪の少年が言うと皆ハッとして顔引き締める。

「この子はどうするの？ハヤテ」

今まで目の前で起こった事に呆然としていた穂菜は初めて黒髪の少年　ハヤテの顔を見る。今まで何も行動をおこさなかったのではっきりハヤテの顔を見る事がなかった穂菜は更に呆然とした。

そして呟いた。

「お兄ちゃん・・・」

そしてハヤテは穂菜の目の前に手をかざした。

穂菜の体に衝撃がはしり穂菜の意識は闇に落ちた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3707b/

偽物の世界

2010年10月16日00時09分発行